



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Building of "Nomadic Socialism": State and Society in the Making of Soviet Kyrgyzstan [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	BEKTURSUNOV, Mir lan
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第15211号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87175
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Mir lan_Bektursunov_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： ベクトゥルスノフ ミルラン

主査 教授 宇山 智彦
審査委員 副査 教授 長縄 宣博
副査 教授 長谷川 貴彦

学位論文題名

Building of “Nomadic Socialism”: State and Society in the Making of Soviet Kyrgyzstan
（「遊牧民的社会主義」の建設：ソヴィエト・クルグズスタンの形成における国家と社会）

・当該研究領域における本論文の研究成果

世界の中央アジア研究の中でクルグズスタンは、人類学・社会学・政治学研究のフィールドとして大きな位置を占めているが、歴史学研究の蓄積は多くない。ソ連時代初期の歴史については、アメリカなどで少数の研究があるほか、クルグズスタン本国では独立後まもない時期にいくつかの研究が出版されたが、クルグズ人指導者への賞賛とソ連の民族政策への肯定的な評価が混ざったバイアスがあるうえに、実証面でも不十分なものである。そのような中で、クルグズスタン出身の本学位申請者が、欧米・日本のソ連史研究の成果を吸収し、行政文書や日記など大量の一次史料に基づいて書いた本論文は、クルグズスタン近現代史の分野で世界的に最先端の研究であり、本国と日本の学界に対しても大きな意味を持つ。

本論文のアプローチとして特に有意義なのは、第一に、ソヴィエト国家とクルグズ社会の関係を、ミクロなレベルでの複雑な交渉や駆け引きの動的な過程として記述していることである。地方の有力者や氏族・部族が、国家の政策に適応しながら自分たちの利益や慣習を守ろうとする姿勢と、公式のイデオロギーと現実的な対応、強硬策と柔軟策の間で揺れながら現地社会を掌握しようとする国家権力側の動きが、生き生きと描かれている。これは人類学や、西洋史研究で発展した社会史の視点に通じるものである。公式・非公式の徴税や農業生産の実態など、経済的な要素の社会的意義への着目も優れている。

第二に、ソ連時代初期を研究の中心としながら、ロシア帝国期・革命期についても重厚な分析をし、ソ連時代後期をも視野に入れることにより、クルグズ人とロシア・ソヴィエト国家の関係、クルグズ人の民族意識・民族運動の展開、部族的・遊牧的伝統といった問題を長いタイムスパンで捉えることに成功し、伝統と近代という大きなテーマを考える材料を提供している。

第三に、政治エリート研究としても優れており、クルグズ人政治家同士・部族有力者同士の複雑な関係に、ロシア人やカザフ人エリートとの関係が絡み合うさまは圧巻である。特に、クルグズ人の自治州の形成過程でカザフ人政治家たちとの関係が重要かつ多面的な意味を持ったことは、従来の研究では見過ごされており、この部分に関連する論文が査読により高い評価を得て、中央アジア研究の代表的な国際学術雑誌 *Central Asian Survey* に掲載されたことは偶然ではない。

これらのアプローチを組み合わせることで、動員主義的・介入主義的な国家としてのソ連の特徴と、遊牧に由来するクルグズ人の慣習や社会構造の生命力をともに浮かび上がらせ、両者の協力・交渉・衝突によってもたらされた社会変革とその限界や悲劇を、過剰な価値判断を入れずに記述し性格付けすることに成功している。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員は、本学位申請者が一次史料に基づいて行った実証の綿密さ、問題関心の広さと深さ、先行研究を把握したうえで打ち出す見解の独自性を、高く評価した。

あえて問題を指摘すれば、以下の点が挙げられる。①論文前半部の政治エリートを中心とした

叙述と、後半部の地方社会の分析は、国家と社会の関係や現地有力者の存在感という視点で一貫してはいるものの、つながりが明示的に説明されておらず、結論はほぼ後半部のみを受けたものになっている。②現地有力者・エリート的位置づけの時間的な変化と連続性をより明快に整理し、特にスターリンの大テロルなどの迫害と、それによるエリートの入れ替えが持った意味を考察する必要がある。③ソヴィエト国家とクルグズ社会の相互適応は非対称であり、基本的な政策の提示は国家の側からなされたこと、それをクルグズスタンで実行する際に現地の事情が大きく作用したにせよ、ソ連全体に特段の影響を与えたわけではないことに留意する必要がある。④定住化政策が妥協的なものに終わったとしても、共同体全体が年間を通して移動することをやめた状態を「遊牧的」と呼ぶことには疑問があり、遊牧と移牧は概念的に区別する必要がある。しかしこれらの問題は主に研究のまとめ方に関わるもので、今後の作業で解決することが十分に可能であり、本論文の重厚な研究成果の意義を低めるものではない。

また、ロシアを含めどこでも社会主義建設は建前と実態の乖離を伴い、ハイブリッドなものでしかありえなかったこと、そしてソ連という存在が現在の旧ソ連地域および世界に様々な影響を残していることを考えるなら、本研究の内容が中央アジア史・ソ連史全体や今日的な問題に対して持つ含意をさらに明確にする余地があろう。しかしこれも、本研究の欠点ではなく発展可能性を示すものである。以上のように、本論文の独自性の高さ、緻密さとさらなる展開の可能性を評価して、審査委員会は全員一致で、本学位申請者が博士（学術）の学位を授与されるにふさわしいとの結論に達した。